



TITLE:

「パスカルの賭」における  
<<trois>>の意味

AUTHOR(S):

湊野, 正満

---

CITATION:

湊野, 正満. 「パスカルの賭」における<<trois>>の意味. 仏文研究 1982, 11: 280-293

ISSUE DATE:

1982-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137652>

RIGHT:

## 「パスカルの賭」における ≪ trois ≫ の意味

湊 野 正 満

### I

「パスカルの賭」≪ *Le Pari de Pascal* ≫ (*Pensées*, fr. 418, in éd. Lafuma, 1962) の名で親しまれている「無限・無」と題された断章は、『パンセ』中で最も有名なもののひとつであるが、その解釈は、『キリスト教弁証論』全体における本断章の位置から、字句の解釈に至るまで、一様でない。

「賭」の断章中の一文について、F・ストロウスキーは、次の様に評釈して、その文章の解釈が不可能であるとする。

*C'est le fameux passage: et vous seriez imprudent, puisque vous êtes dans la nécessité de, etc., dont aucun commentateur n'a donné et ne pourra donner une explication satisfaisante. Sans doute Pascal aura oublié ou confondu des mots essentiels.*

(*Œuvres Complètes de B. Pascal*, éd. F. Strowski, Ollendorff, 1931, tom. III, p. 38) [引用1]

かつて筆者は、「賭」の自筆原稿（写真版）を調べた（修士論文「『賭』の成立について」、大要は ≪ *Sur le processus du Pari de Pascal* ≫ in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, 白水社, N°34, 1979, pp.19-44 参照）。一般に、パスカルは、繰り返し原稿を読み直し、手を加えて行くことが知られている（前田陽一、『パスカル「パンセ」注解』、岩波書店、1980、等参照）。ところで、ストロウスキーの言及している一文にも加筆の跡があるが、この加筆は、前田陽一氏の『パンセ』原稿の研究を信ずるなら、パスカルがこのテキストを書き上げ、しばらく時が経った後に再び目を通したことを示しているように思われる（前田陽一、前掲書、pp.189-190）。かりに、ストロウスキーの主張するごとく、パスカルが「重要な語句を書き忘れたか、混同した」とすれば、読み直した際にそのことに気が付いて訂正しているはずであるが、原稿上にこの様な意味での訂正が見当らない以上、筆者は本テキストが解読可能であると信ずる。

小論の目的は、ストロウスキーが解釈不可能と評釈している一文の意味を明らかにすることである。

以下に、ストロウスキーの言及している一文を含む段落の全文を掲げる。なお、小論中に引用する『パンセ』の本文は、パスカルの自筆原稿（写真版）に直接準拠している。また、「賭」の断章全文は、拙論《Sur le processus du *Pari* de Pascal》所収のテキスト（pp. 34－37）を参照されたい。

— Voyons. Puisqu'il y a pareil hasard de gain et de perte, si vous n'aviez qu'à gagner deux vies pour une, vous pourriez encore gager. Mais s'il y en avait trois à gagner, il faudrait jouer (puisque vous êtes dans la nécessité de jouer), et vous seriez imprudent, lorsque vous êtes forcé à jouer, de ne pas hasarder votre vie pour en gagner trois à un jeu où il y a pareil hasard de perte et de gain. Mais il y a une éternité de vie et de bonheur. Et cela étant, quand il y aurait une infinité de hasards dont un seul serait pour vous, vous auriez encore raison de gager un pour avoir deux, et vous agiriez de mauvais sens, étant obligé à jouer, de refuser de jouer une vie contre *trois* à un jeu où d'une infinité de hasards il y en a un pour vous, s'il y avait *une infinité de vie infiniment heureuse à gagner*. Mais il y a ici une infinité de vie infiniment heureuse à gagner, un hasard de gain contre un nombre fini de hasards de perte, et ce que vous jouez est fini. Cela ôte tout parti. Partout où est l'infini et où il n'y a pas infinité de hasards de perte contre celui de gain, il n'y a point à balancer, il faut tout donner. Et ainsi, quand on est forcé à jouer, il faut renoncer à la raison pour garder la vie, plutôt que de la hasarder pour le gain infini aussi prêt à arriver que la perte du néant.

(*Pensées*, fr. 418 in éd. Lafuma, texte établi et souligné par nous.)

[引用 2]

## II

問題の一文を解釈するための予備的作業として、次の手続きを取る。まず、「賭」の執筆動機に触れ、次に、本断章全体の構成と、問題の一文の位置を明らかにし、その上で、この文章の解釈上の困難さの所在を尋ねよう。

### 1 「賭」の執筆の動機

筆者は以前、「賭」の断章の生成について説いた際に、断章が最初どのような状

態（小論ではこれを初稿と呼ぶ）で成立したかを明らかにした。

17世紀には、リベルタンと呼ばれる無神論者が、キリスト教の信仰を根底から揺すぶっていたが、これに対して、神の存在や靈魂の不滅を損得勘定により説得して、信仰に踏み止まらせようとする議論が流行していた。これらの議論と「賭」の初稿を比較すると後者は前者を大きく超えるものではなかったことがわかる。パスカルは、その様な議論をどこかで読んだり、耳に入れたりしていたと推測される。そして、これを利用すれば、リベルタンには何の説得力も持たぬ聖書や教会の権威、教義などに頼らずに、神を求めることが理性的行動であることを示し得ると、パスカルは考えたにちがいない。こういったことから、「賭」の執筆の動機は、無神論者が理性にのみ従うべきだと主張しているにもかかわらず、実は、神を信じないという彼らの行為こそが理性に悖ることを指摘することにあつたと思われる。

この初稿に加筆が施されて、「賭」は、今日『パンセ』諸版の中に見られる様な文章に成長していくのである（前掲の拙稿）。

## 2 「賭」の構成について

本断章の全体は次の3つの部分によって構成される。

(i) 人間の認識能力について

(ii) 賭

(iii) キリスト者への道<sup>1)</sup>

### 2-1 人間の認識能力について

パスカルは、ここで心情の直観による認識と推論による知性的認識に触れ、後者の射程と限界に関する原理を提示し、その後この原理に従って、知性的認識によっては、神の性質どころか、神の存在の是非についてさえも結論を下すことができぬと論ずる。

### 2-ii 「賭」

この部分は、さらに＜要約的な賭＞と＜数学的な賭＞の2つから成る。

#### ii-a＜要約的な賭＞

神は存在するか否かのいずれかであり、知性的認識の能力である理性は、そのいずれが正しいとも、まちがっているとも決定を下せない。この問題は理性を超えているのであるから、いずれを選択しても、理性は誤ったという批判をうけない。<sup>2)</sup> それでは、どちらの側に賭けるのが有利であろうか。というのも、初めから不利とわかっている側に賭けるのは、理性に悖る行為であろう。神なしに賭けて勝ったところで何も得るものはない。しかし、負ければ地獄落ちである。神ありに賭けて負けても

何も失うものはないが、勝てば、すべてを手に入れることになる。この損得は明らかである。従って、神ありに賭けることこそ理性の命ずるところである。

## ii - b <数学的な賭>

ここでは、次の2点が検討される。ひとつは賭け率についてであり、もうひとつは賭けて勝つことの不確実と賭けないものの確実のバランスについてである。

### 2 - iii キリスト者への道

損得勘定で、人はキリスト者になれるのであろうか。否。そこで、対話者にキリスト者になる道を示す。

#### 3 テクストの断章内での位置、解釈上の問題点

問題のテキストすなわち引用2は、<数学的な賭>の前半の部分である。

3 - i その少し前のテキストから読んでみよう。

Pesons le gain et la perte, en prenant croix que Dieu est. Estimons ces deux cas: si vous gagnez vous gagnez tout; si vous perdez vous ne perdez rien. Gagez donc qu'il est sans hésiter. [引用3]<sup>3)</sup>

これは、キリスト者が、賭を提示する部分である。これに対して、対話者は次の様に答える。

#### 3 - ii

— Cela est admirable. Oui, il faut gager; mais je gage peut-être trop. [引用4]

この対話者の言葉は注目すべきである。ここで無神論者は、いったん«Cela est admirable»と言って賭を賞賛している。しかし、«Oui, il faut gager; mais [...]»（強調筆者）という表現から明らかな様に、対話者は、本心では賭を受け入れようとはしていない。これをテキストの書き手と読み手というレベルに置き直してみると、読者は引用4の無神論者の言葉に、異口同音賛同の意を示し、共感するであろう<sup>4)</sup>。書き手の側から言えば、«[...] il faut [...] mais»という表現で読み手の心をひきつけながら«je gage peut-être trop»（強調筆者）と書くことにより、神ありに賭けることができぬ（従って、賭けることができぬ）と内心では考えている読者を相手にするという意志を表明すると共に、賭け率の問題と取り組むことになる。従って、以下の賭け率の議論においては、神ありに賭ける側の数学的期待値が、賭けぬ（賭けるべき現実の生を賭けずに生きる）とする側の値、すなわち1を

超えるか否かが問題となる。この点は、Ⅱ－3－Ⅵにおいて検証することにして。

### 3－Ⅲ

ここで、もうひとつ明確にしておくべきことがある。それは「賭」の文章から、キリスト者の対話者に対する徹底した譲歩という大きな動きを読み取らねばならないということである。(ii)「賭」の提示の初めにおいて、人間の認識能力として、理性しか認めようとししない無神論者に対して、キリスト者は次の一言で譲歩する。《Parlons maintenant selon les lumières naturelles》。又、＜数学的な賭＞においては、神ありに賭けて勝つ場合の確率について、神は存在するか否かであるから $1/2$ であると提示するが、次いで勝つ場合を「仮に $1/\infty$ としても（なお）」と譲歩する。従って、譲歩がなされた時点では、譲歩された条件で、あらためて得失が問い直されることになる。さらに＜数学的な賭＞の議論の最後に置かれるべき《fin de ce discours》と指示されている段落<sup>5)</sup>においては、無神論者の固執する現世においてすでに神ありに賭けて得であることが述べられる。現世の損得を語ること自体、ある意味で譲歩していると言えよう。この様に、神を信じぬ対話者に対してどこまで譲歩しても、理性にのみ従うという対話者の原則から、神を信ずべきであることが導き出されることを示そうとしているのである。

ラコンブは、賭の勝ち負けの確率について、次の様な問を発している。

En plusieurs passages Pascal considère ces chances comme égales [...]  
Par contre en un seul texte, mais qui est essentiel, [...] Pascal déclare ce qu'il y a « un hasard de gain contre un nombre fini de hasards de perte ».  
(Roger-E. Lacombe, *L'Apologétique de Pascal*, P. U. F., 1958, pp. 78–79) [引用 5]

この様な問は、果して正当なものであろうか。この様な問を発すること自体、賭の数学的議論のダイナミックな動きを無視するものではないだろうか。<sup>6)</sup>ここでは、条件は一回一回変るのである。すなわち、神ありに賭ける側に次第にきびしくなっていく、言い換えれば、それだけ、神なしとする側に譲歩していくことになるのである。

さてそこで本文を読みつつ、問題の所在を尋ねていくことにしよう。

### 3－Ⅳ 勝つ可能性が $1/2$ とすると……

(a) Voyons. Puisqu'il y a pareil hasard de gain et de perte, si vous n'aviez qu'à gagner deux vies pour une, vous pourriez encore gager. (b)

Mais s'il y en avait trois à gagner, il faudrait jouer (puisque vous êtes dans la nécessité de jouer), et vous seriez imprudent, lorsque vous êtes forcé à jouer, de ne pas hasarder votre vie pour en gagner trois à un jeu où il y a pareil hasard de perte et de gain. [引用 6] (但し, (a), (b)は筆者の付加。以下同様。)

ここで、数学的期待値について例を挙げて説明しておこう。A, B二人が、ともに100円ずつ賭けてコインを投げ、表か裏かを当てるゲームをしましょう。コインは表か裏か2通りの出方しかない。従って、場合の数は2であり、A, Bの勝つ可能性は、いずれも1/2である。又、賭けるものは100円、得るものは200円であるから、これは対等の賭と言える。このことから数学的期待値(e)は次の数式に表わされる。

$$e = \frac{(\text{得るもの}) \times (\text{勝つ確率})}{(\text{賭けるもの})}$$

このeが、1より大きければ有利な賭、1であれば対等の賭、小さければ不利な賭と言える。

引用6の(a)の場合には、 $e=1$ 。これは対等の賭と言える。従って、*«vous pourriez encore gager»*と言い得るのである。

さて、(b)の方はどうであろうか。得るものがひとつ増えるので、 $e=3/2$ である。1より大きいということは、神ありに賭けなければ、理性的に振舞ったことにはならない。

3-V 勝つ可能性を  $1/\infty$  と仮定すると……

(a) Mais ici il y a une éternité de vie et de bonheur. Et cela étant, quand il y aurait une infinité de hasards dont un seul serait pour vous, vous auriez encore raison de gager un pour avoir deux, (b) et vous agiriez de mauvais sens, étant obligé à jouer, de refuser de jouer une vie contre trois à un jeu où d'une infinité de hasards il y en a un pour vous, s'il y avait une infinité de vie infiniment heureuse à gagner. [引用 7]

今度は、勝つ可能性を  $1/\infty$  と仮定してみよう。(a)の場合、実際 *«une éternité de vie et de bonheur»* ( $=\infty$ ) であるのだから、eは次の様になる。

$$e = \frac{\infty \times \frac{1}{\infty}}{1} = 1$$

確かに、現代の数学では $\infty \times 1 / \infty = 1$ とはならない。しかし、パスカルの頭の中では、この様に考えられていたのであろう。

さて(b)の一文こそ、ストロウスキーが解釈不可能としたものである。困難はどこにあるのだろうか。それは、パスカルが、賭に勝った場合に得るものとして、*«(une vie contre) trois»* と *«une infinité de vie infiniment heureuse»* との2つの表現を提示しているからである。この一文の解釈は、後に行なうことにして、今はⅡ-3-iiにおいて言及した問題に戻ることにしよう。

### 3-vi

筆者は、先に「賭け率の問題においては、神に賭ける側の数学的期待値が1を超えるか否かが問題になる」とした。この点を引用の6及び7から検証したい。

そこで、まず、神ありの側に賭ける場合の期待値のみが変化するというのは、どうしてであろうか。「賭」の断章の書き手は、「神ありに賭けることができないと内心では考えている読者」を前提にこの文章を書いている。この様な読者が、神なしに賭ける人ということになる。彼らはこの賭に勝って、いったい何を手に入れるのであろうか。何もない。神ありに賭けられぬと内心では考えている人々にとって、現世とは、確実に生きることのできるひとつの生である。従って、神なしに賭けるのではなく、神ありに賭けぬことによって、手のうちにあるひとつの生を確実に生きることであるから、これは期待値に関わる問題ではない。神ありに賭けぬとは、コイン投げ遊びの例で説明するなら、200円を得るために100円を賭けることをせず、手のうちにある100円を自分の自由に使うことである。数学的期待値とは、あるものを賭けた場合、可能性として、いったいそれが、元のものに対して、どのくらいの価値を持っているものかを示す指標なのである。従って、神ありの側の数学的期待値と比較する場合に、神なしの側の値を1として扱うべきである。

従って、ブランシュヴィックや若干の日本語訳者のごとく、神なしの側の数学的期待値を算出したり、又、その数式を提示したりするのは、まちがいである。

さて、以上の点を具体的にテキストから検証したい。引用6-(a)において、神ありの側に賭けて勝つ期待値は、1であった(Ⅱ-3-iv)。ここで、キリスト者が*«vous pourriez encore gager»* と言うが、この*«encore»* というのは、期待値が1というまったく対等な賭においてさえもという程の意味である。その様な条件においてさえ賭けることができると言っているのである。神ありの側の期待値と比較する場合、神なしの側の値は1でなければならないと前に述べたが、神なしの側の値が1であってこそ初めて*«vous pourriez encore gager»* と言い得るのである。



もし、ブランシュヴィックらの様に、神なしの側の期待値を  $1/2$  と算出するなら、この場合には、明らかに神ありの側の期待値が有利になってしまい、*«vous pourriez encore gager»* とは言えなくなってしまうのである。引用7の場合を見てみよう。ここでも、神ありに賭ける側の期待値は1であった。そして、その側に賭けるとしても、*«vous auriez encore raison»*（強調筆者）と言われているのである。ここで、神なしの側の値を1と考えなければ、この一行の理解ができないのである。

以上の様に、期待値に関するテキストでは、神ありの側に賭けることのみが問題とされ、その側に賭けた場合の期待値のみが算出されるべきなのである。

### III

さて、問題の一文が、これまで、どの様に扱われて来たかを見てみよう。但し、ここでは、年代順に取り上げることはせず、まずこの一文を理解不可能であるとする説を、次に理解可能とする説を紹介しさらに検討しよう。

#### — 理解不可能説 —

##### 1- i ポール＝ロワイヤル版 (1670)

『パンセ』の初版であるポール＝ロワイヤル版ですでにこの部分のテキストは理解不可能とされたように思われる。というのも、この賭け率に関する部分は、著しく改竄されているからである。ここで、ポール＝ロワイヤル版に見られるテキストから、賭け率に関する全文を掲げる。

[...] Oüy il faut gager. Mais je gage peut-estre trop. Voyons: puisqu'il y a pareil hazard de gain et de perte, quand vous n'auriez que deux vies à gagner, pour une, vous pourriez encore gager. Et s'il y en avoit dix à gagner, vous seriez imprudent de ne pas hazarder vostre vie pour en gagner dix à un jeu où il y a pareil hazard de perte et de gain. Mais il y a icy une infinité de vies infiniment heureuses à gagner avec pareil hazard de perte et de gain; et ce que vous jouëz est si peu de chose, et de si peu de durée qu'il y a de la folie à le ménager en cette occasion.

(*Pensées*, éd. Port-Royal, 1670, p. 56)

[引用8] (強調筆者)

比較するまでもなく、以上のポール＝ロワイヤル版のテキストでは、問題の一文は削除され、別の短い文章に書き換えられている。

1-ii E・アヴェ (1852)

アヴェは、自身の編纂した『パンセ』の中で、この一文に注を付けて、初めて、この本文が解釈不可能であると述べた。

Les éditeurs de P.-R. ont retranché cette phrase: nous croyons qu'ils ne l'ont pas comprise: pour nous, nous ne la comprenons pas. [...] Pascal, qui écrivait très vite ces notes, s'est peut-être trompé en écrivant.

(*Pensées*, éd. E. Havet, 1852, p. 148)

[引用9]

1-iii F・ストロウスキー (1931)

ストロウスキーについてはⅠを参照。

1-iv G・ブリュネ (1956)

ブリュネは、草稿上の加筆訂正に触れつつ「賭」のテキスト分析を試みているが、そこで彼は初稿と後の加筆を区別せずに、加筆を専ら初稿執筆時の躊躇の跡とのみ解釈し、問題の一文を「かす」*«scolies»* (G. Brunet, *Le Pari de Pascal*, D.D. B., 1956, p. 78)として切り捨てている。

— 理解しようとする試み —

2-i H・グイエ (1956)

グイエは、著書*«Pascal Commentaire»*の中で、「賭」の断章について一章をさいている。そこで、グイエは、この部分の新しい読み方を提起する。

((s'il y avait une infinité de vie infiniment heureuse à gagner =)) : comme dans le cas précédent, il est inutile d'achever la phrase. Le signe = suffit: à plus forte raison...

(H. Gouhier, *Pascal Commentaire*, Vrin, 1956, p. 261)

[引用10]

このグイエの説は、少々説明を必要とするであろう。*«S'il y avait une infinité de vie infiniment heureuse à gagner»*の節こそ、問題の一文(引用7-(d))の理解を困難にしているのである。そこでは、神ありに賭けて勝った場合に得るものとして*«(une vie contre) trois»*と*«une infinité de vie infiniment heureuse à gagner»*との2つが提示されているからである。そこで、後者を提示する*«si»*の節だけを独立させて、切り離して考えようというのがグイエの説である。その際、主節に相当するものが不足するので、自筆の草稿上で、*«si»*の節のあとにあるコロンの(*deux points*)に見えるインクの跡をイコール(=)という記号と解釈し、これに「より強い理由から」という意味を付与する。その上で主節が省略されている

と解釈するに至る。

パスカルの自筆の草稿には、他にこれに類する省略記号は見当たらないので、ここだけ特権的に、この様に解釈することに筆者は賛成できない。

## 2-ii ラシュリエ (1901)

問題の一文の解釈の試みのうち、上に紹介したグイエ以外のものは、ほとんどが、その解釈原理をラシュリエ (J. Lachelier: «Notes sur le pari de Pascal», in *Revue philosophique*, juin, 1901, *De Fondement de L'Induction*, Félix Alcan 再録<sup>7)</sup>) に負うていると言って良い。

ラシュリエによれば、引用7において、神ありに賭けて勝った場合に得るものとして «une éternité de vie et de bonheur» と «une infinité de vie infiniment heureuse» の2つの表現によって示されているものを曖昧に理解して、表現価値の等しいものとみなすとすれば、その解釈を誤ってしまう。すなわち、双方の表現をそれぞれ要素に分解して、まず、第一の表現は、次の3つのものを意味するという。

- 1° une vie de longueur ordinaire
- 2° un bonheur pareil à celui dont nous jouissons par moments, mais sans intermittance pendant toute la durée de la vie
- 3° la multiplication de cette durée par l'infini

さて第2の表現は、以上の3つに加えて、さらに次のことを意味する。

- 4° l'infinité intensive, la grandeur infinie du bonheur à venir dans chaque instant de sa durée

すなわち、ラシュリエの解釈によれば、引用7は、次の様に理解される。たとえ勝つチャンスが  $1/\infty$  であっても、もし1°の現世を神ありに賭けて勝てば、2°の幸福と3°の無限の生を手に入れられるのであれば、神ありに賭けても、まちがったことをしたことはない。ところが、もし、勝った場合に、これらに加えて、さらに4°の無限の幸福を手に入れることができるのであれば、神ありに賭けなければまちがったことをしたことになる。

ラシュリエ自身 «Cette interprétation me semble à moi-même forcée» と告白している。そこで、ブランシュヴィック、ラコンブらは、ラシュリエの開いた道を、さらに前進させようとする。

## 2-iii ブランシュヴィック (1904)

ここで、まず、賭の基本的約束を思い出しておこう。A、B両者がコイン投げをする場合、例えば、双方が100円ずつ賭けるなら、勝者は、200円を手に入れるだろう。しかし、手にするもののうちの100円は、賭に参加するための賭金である。従って、「賭」の断章に出てくる「2つの生」、あるいは「3つの生」を得るという表現において、この数のうちに賭ける現世の生が含まれているということである。この現世の生を数える点がブランシュヴィックの工夫である。

Le texte ne permet qu'une interprétation: il faut distinguer avec Lachelier, ((l'éternité de vie et de bonheur)), et ((l'infinité de vie infiniment heureuse)). Dans le premier cas Pascal nous promettait l'infinie durée d'un bonheur fini; il y ajoute dans le second cas l'infinité de ce bonheur lui-même: ce nouvel infini fait exactement ce que faisait tout à l'heure la troisième vie, il s'adjoint comme un lot supplémentaire aux conditions strictement équitables du pari et rend nécessaire pour la raison ce qui n'était que possible et indifférent.

(*Œuvres Complètes de B. Pascal*, éd. Brunschvicg, tom, XI, p. 149, note 3) [引用 11]

以上がブランシュヴィックの解釈であるが、この解釈において、2つの類似した表現を区別することは、ラシュリエの解釈を受け継いだものであり、筆者も賛成である。しかしながら「*l'éternité de vie et de bonheur*」は「*l'infinie durée d'un bonheur fini*」(強調筆者)と解されるべきであるという主張は、どんなものであろう。両者の表現には、乗り越え難い差がある様に思われる。

#### 2-IV ラコンブ(1958)

ラコンブは、著書「*L'Apologétique de Pascal*」の中で「*L'interprétation que je donne me semble être en accord avec celle de Brunschvicg dans son édition des Œuvres de Pascal*」(Lacombe, *L'Apologétique de Pascal*, P. U.F., 1958, p. 83, note 20)と言っている様に、ブランシュヴィックの解釈における「*l'infinie durée d'un bonheur fini*」を「*une vie et un bonheur d'une durée infinie*」と、又「*l'infinité de bonheur lui-même*」を「*une intensité infinie du bonheur*」と書き換えただけのものにすぎない。なお、2番目の項に見られる「*intensité*」はラシュリエの解釈から来ている。

## IV

### 1 新しい鍵、＜数学的な賭＞の初稿テキスト

さて、筆者は、この問題を解決するために新しい資料を提出したい。それは、賭け率に関する段落全文の初稿テキストである。以下に挙げる初稿テキストは「賭」の自筆草稿に「パンセ原稿複読法」を適用して、確立したものである。

#### ＜数学的な賭＞の初稿テキスト

Voyons: puisqu'il y a pareil hasard de gain et de perte, si vous n'aviez qu'à gagner deux vies pour une, vous pourriez encore gager. Mais s'il y en avait trois à gagner, il faudrait jouer (puisque vous êtes dans la nécessité de jouer), et vous seriez imprudent, lorsque vous êtes forcé à jouer, de ne pas hasarder votre vie pour en gagner trois à un jeu où il y a pareil hasard de perte et de gain.

Mais il y a une éternité de vie et de bonheur. Et cela étant, quand il y aurait une infinité de hasards dont un seul serait pour vous, vous auriez encore raison de gager un pour avoir deux, et vous *auriez tort*, étant obligé à jouer, de refuser de jouer une vie contre trois à un jeu où d'une infinité de hasards il y en a un pour vous s'il y avait une infinité de *bien* à gagner.

Mais il y a ici une infinité de vie infiniment heureuse à gagner et *autant de hasard de gain que de perte* et ce que vous jouez est fini. Cela ôte tout parti. Partout où est l'infini et où il n'y a pas infinité de hasards de perte contre celui de gain, il n'y a point à balancer, il faut tout donner. Et quand on est forcé à jouer, il faut renoncer à la raison pour *choisir* la vie plutôt que de la hasarder pour le gain infini aussi prêt à arriver que la perte du néant.

[引用 12] (引用文中のイタリックは初稿における異本、すなわち「最終稿」とのヴァリエーション)

2 初稿テキストにおいて「*infinité de bien*」<sup>8)</sup>であったものは、後で「*infinité de vie infiniment heureuse*」と書き直される。この書き換えは重要な情報を提供してくれる様に思われる。というのは、これまで多くの研究者が推論から仮説的に導き出して来たことであるが、初稿テキストにおいては、2つの生あるいは3つの生といった表現に対して、そこで問題になっている生のひとつが、それも、2つの生に対してさらに加えられる3つ目の生が少なくともここにおいては、無限に幸福な生であることを、初めて実証的に根拠付けてくれるからである。

さて、ラシュリエ以下の研究者は、*«une éternité de vie et de bonheur»*と*«une infinité de vie infiniment heureuse»*を区別したが、この考えには筆者も賛成であるとは前に述べた。ただし、その区別の仕方が問題である。すでに見た様に、従来の研究者は2つが表現する実体において区別しようと努めた。もし、実体において両者の差異を見い出そうとすれば、彼らと同じジレンマに陥るであろう。

果して、2つの表現は異なる実体を指しているのでしょうか。良識の声は、これらが共に来世の生を指し示していることを告げてはいないであろうか。その場合、この両者の差異を見い出すとすれば、実体においてではなく、2つのパラフレーズが我々に促す来世の生に対する視点の深まりにおいてではないだろうか。第1のパラフレーズは、来世の生を言い換えたものであるが、他方、来世の生が持つ2面性に触れることによって、*«une infinité de vie infiniment heureuse»*という表現を準備するものであり、後者は、前者のパラフレーズをより深化させ、来世の生が、実は無限の生であると同時に無限に幸福な生でもあること、つまり来世が内包する二重の生に読者の注意を向けさせるのである。

この2つの表現の解釈において重要なことは、我々の視点を深める、いわば弁証法的な動きに注意を向けることではないであろうか。

## 註

1) (i) 人間の認識能力について：*«Notre âme est jetée dans le corps, [...]»* (拙論, p.34)より、*«Or, j'ai déjà montré [...] d'une chose sans connaître sa nature.»* (同, p.35)まで。

(ii) 賭：*«Parlons maintenant [...]»*(p.35)より、*«Cela est démonstratif; et si les hommes sont capables de quelque vérité, celle-là l'est.»* (p.36)まで。

(iii) キリスト者への道：*« — Je le confesse, je l'avoue, [...]»* (p.36)より、終りまで。

2) これは、パスカルが無神論者の唯一の公準である理性から、この選択に関する責任を取り除くことを意図している。

3) 初稿の結論部分。なお、初稿テキスト全文は、拙論 *«Sur le processus du*

*Pari de Pascal*», pp. 28–31 を参照されたい。

- 4) 「賭」の文章が、最も無用である人々は、真のキリスト教者であろう。この文章において、パスカルが共感させようと努めなければならない読者は、無神論者ではなくとも、少なくとも神を信じていない人々であろう。
- 5) この段落の位置については諸説ある。この点に関する筆者の考えは、前掲の拙論 p. 33, I – 2 – IV – b において述べてある。自筆原稿の調査から言えることはほぼ次の通りである。草稿 7 ページには、主として＜数学的な賭＞のほぼ全文が見い出される。その余白には、*« fin de ce discours »* に導かれて問題の段落がある。この語は一種の挿入記号の役割を果たしているが、この *« discours »* とは＜数学的な賭＞であると考えられる。従って、この段落は、その直後に位置すべきである。
- 6) ラコンブによれば、パスカルは、賭けるものの価値についても、*« un pur néant »* であるとも、*« un bien véritable »* であるともうけとられる書き方をしているという。彼は、パスカルの真の考えはどちらかと問うている(Lacombe, *ouv. cit.*, p. 76)。ここでも、ラコンブは、パスカルの弁証法でダイナミックな議論を十分に理解していないように思われる。
- 7) 2つのテキストの間には若干の異本がみられるが、ラシュリエの「賭」の解釈の趣旨は同じである。
- 8) ブランシュヴィックは、*« infinité de bien »* を *« infinité de lien »* と読んでいる。*« bien »* と読んだのはトゥルヌールが初めてであり、以後、この読み方が行なわれている。